

〈資料紹介〉 田中英光の青年時代

——「非望」創刊号と戦中書簡——

田 中 励 儀

昨年は田中英光没後七十年という節目の年だったが、とくに話題のぼった形跡はない。英光が師事した太宰治が、生誕一〇年を記念して東京青森ほか各地で展覧会が催されるなど、顕彰イベントがつづいたのとは対照的である。昭和四十四年一月には「織田作之助・田中英光・坂口安吾三人展（於：伊勢丹本館）が開催され、無頼派作家の一翼を担っていた英光なのに、太宰の墓前で剃刀自殺を遂げた事件が文壇史に残るだけでは、あまりに寂しい。十五年戦争の中で学生生活を送り、ロサンゼルスオリンピックのボート競技に参加。帰国後は文芸同人雑誌を発行し、卒業してゴム会社に就職。赴任先の朝鮮で応召し、戦闘の寸暇に構想し書き始めた小説「杏の実」が、太宰の斡旋で「オリムポスの果実」と題されて「文学界」に掲載されたのが昭和十五年九月だった。本稿では、この青年作家の出發期を位置づける資料をいくつか紹介したい。

文芸同人雑誌「非望」創刊号

田中英光著作目録の基礎となる、林清司編「田中英光年譜」（『田中英光全集』第十一巻、昭和40・12・20、芳賀書店）には、昭和十年^マ二月から九月にかけて、文芸同人雑誌「非望」が六冊発行され、英光の「急行列車」「空吹く風」など、四つの小説・評論が掲載されたことが記録されている。ただ、例えば創刊号の発行月に誤記が見られることなどから、編者がどのくらい原誌を確認していたのか、はつきりしない。

「非望」創刊号（昭和10・3・1、非望発行所）については、西村賢太氏が「田中英光私研究」第七輯（平成7・11・3、私家版）において、同人のひとり神戸政年氏の回想「ままならぬ人生航路」を紹介する中で、「現物確認」と注記している。西村氏は創刊号の同人名簿に記された人名や、英光の小説「急行列車」が出方名英光

名義で巻頭を飾っていることなどを伝えている。今回、私も「非望」創刊号を入手したので、原誌を確認して新たに判明した事実を、西村氏の驥尾に付す形で紹介したい。

まず、逸文である。創刊号には、出方名英光「急行列車」、山口寛雄「彌之助の事ども」、伊牟田恭輔「無償」、鳴海軍「南京蟲」、神戸哲六「佐山氏の話」の小説が並んだ後、〈雑記帳〉のコーナーが五頁分設けられ、佐藤佐・出方名英光・岡田幸男・森健夫が文学や演劇への意欲を語っている。これまで知られていなかった、英光最初期の文章として貴重なので、全文を紹介する。

凡そ世の小説と云ふ小説には食傷してしまひ、なんて無用の書物ばかり多いのであらうかと不遜にも嘆き、その癖、浮世の学問とか、実践にはてんで手も出ない懶惰な精神をもてあましてゐる私などは、一体如何すれば好いのであらうか。此の頃の私にとつては、訓へてくれる本よりは、溺れさしてくれる本でなければ到底読む気になれない。と云つて溺れた後で、悔を覚えさせぬ書物と云つたらほんたに少ないものだ。所謂、学者とか詩人のものする時の顔はいかにも、だれ気を催ほさせる。月々の雑誌によくもまア、けち臭い野心満々たる、その癖、誰も彼もが同じ様な指導概念にわりはめられた文章をつづるものだ。なんぞと偉さうに徒らに、むしろを走らせたつて

始まらない。兎に角、自分で書いて見てからだ。さうだ、私達は十年計画で、此の雑誌を創めたのである。

×
言はでもの事――。

× 今日程、理性を信ぜずにはゐられぬ時代は少ないらしい。

× 黙つて仕事をする事。周囲でわい／＼言ふ連中の顔も、必然的なものとして、認め、且つ取入れ乍ら。

× 新らしい旗幟をひるがへすと云ふことは、山師か、お目出度い男でなければやるものでない。後者は、勿論、字義通り、犠牲的精神に富んだ偉い人だと想ふ。

× 僕達も、綱領こそか、げね、それを黙々の裡に実行したいと望んでゐる。

× 山猪路を分たず路を行くに残照その目脂を焼きぬ。

× 「非望」精神に就いて――。
僕にとつて、文学とは、やる、やらないの問題ではない。一つの

生活苦に他ならないのである。

早稲田大学卒業を控えた昭和十年三月、数え二十三歳の文学青年の気負いが勝った文章である。「訓へてくれる本よりは、溺れさしてくる本」を求め、「同じ様な指導概念にわりはめられた文章」を嫌悪する。「理性」を信じ、「新しい旗幟をひるがへすと云ふこと」を「黙々の裡に実行したい」。その実行の場が「非望」だといっているのである。

もつとも、その実践であるはずの小説「急行列車」は、同じ車輛に乗り合わせた青年が、自殺や狂気に対する魅力と恐怖、二律背反の思いの中で過激な会話を重ねる観念的な内容に止まっている。

「自意識過剰、シエストフ的不安、描写のうしろに寝ていられない」といった、昭和十年代の雰囲気は濃厚にただよってくる」（針生一郎「解説」『田中英光全集』第二巻、昭和40・5・31、芳賀書店）ものの、「絶叫と号泣、過剰な演技性、坂口安吾のファルスにも似た錯乱劇」（越前谷宏「急行列車」『田中英光事典』平成26・4・30、三弥井書店）が成功しているとはいいがたい。英光は、最初の単行本『オリムポスの果実』（昭和15・12・15、高山書院）「跋に代へて」で「俺はこの頃、泉鏡花ばかり読んである」と記すが、自身が鏡花のような「溺れさしてくる本」を著すのは、まだ先のことである。

誌名の由来をめぐって、同人のひとり佐藤佐が「小林秀雄訳のラッポオの「地獄の季節」をめぐっている内、「非望」の文字が眼についた」（『斜陽館にて』「桜桃」25、昭和53・5）と回想し、神戸政年「ままならぬ人生航路」は、「非望」とは熱望の反語で熱望よりも含蓄があるとのことで、一同の賛成多数で決定した」と記している。その「含蓄」について、英光は「僕にとつて、文学とは、やる、やらないの問題ではない。一つの生活苦に他ならないのである。」とのべるが、「生活苦」という語に託した意味ははっきりしない。同じ〈雑記帳〉で、森健夫は「文壇常識への反逆」だとして、「現在文壇へのマイナスである僕等の非望が正座に立ち直る日こそ僕等の雑誌の歓喜に充ちた解散の日である。」と、既成文壇への對抗を露わにしている。いっぷう変わった誌名に込められた改革への熱意は、創刊号に際立っている。

「非望」創刊号は、全六十九頁。一部二十銭。編輯兼発行人は岡田幸男。十名の同人のうちのひとり、非望発行所の住所も「東京市芝区南佐久間町二丁目十番地（岡田方）」とされている。また、出方名英光が「一九三五・一・一五・夜」、山口寛雄が「一九三五・一・一六」、神戸哲六が「一九三五・一・四」と欄筆日を添えている。奥付に「昭和十年二月二十日印刷 昭和十年三月一日発行」と記されているので、およそ一ヶ月半の編集期間だったことがわかる。

戦中書簡

卒業後、程なくして横浜護謄製造株式会社朝鮮出張所に赴任した英光の作家志望は強く、「空吹く風」(「非望」第五号、昭和10・8、未見)が太宰治の目に留まったことから、太宰文学に傾倒する。神戸政年の証言によれば、京城の英光から叱咤される格好で「非望」第六号を発行したが、「原稿も毎号送って来るのはデカタナただ独りと云う有様、外は雑文その他で埋めあわせる状況となり、残党八人協議の末デカタナには悪いが廃刊止むなしと決議」したという。学生が主宰した文芸同人雑誌が、同人が社会人となり日々の暮らしに追われるなかで廃刊となる、よくある道筋を「非望」も歩んだのであろう。

佐藤佐が伝える「田中からは「非望」を毎月出すようにと失^マつぎ早やの催促の手紙が来た」との回想をふまえれば、内地から遠く離れた朝鮮で廃刊の知らせを聞いた英光の失望は、容易に想像できる。作品発表の舞台を失った英光の許に、やがて召集令状が届く。「田中英光年譜」によれば、昭和十二年七月十六日に第一回目の応召。京城府竜山第七十九聯隊補充隊第三中隊に入隊し、訓練を受けて同年十二月十三日に一等兵に進んで除隊した。前線に赴いたのは第二回目の応召時である。昭和十三年七月一日、平壤府齋藤部隊大久保隊第六班に所属、直ちに北支派遣軍牛島部隊真野部隊田中隊在明隊

に配属され、中国山西省に駐留する。以後各地を転戦し、一時、病を得て陸軍野戦病院に入院するも、昭和十四年一月に上等兵に進み原隊復帰。三月に藤室部隊に転属、その後も転属を繰り返し、十二月に山西省から引き揚げ、昭和十五年一月五日に除隊する。

この間に内地の親族に宛てて送られた葉書・書簡三通を紹介する。以前、「同志社国文学」第八十四号(平成28・3)で紹介した、昭和十四年(推定)十二月十二日付岩崎英恭宛書簡に先立つもので、いずれも長兄・岩崎英恭および母・済に宛てたものである。

【A】田中英光葉書

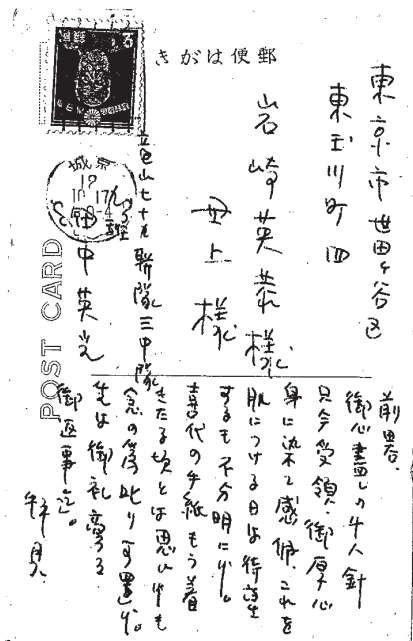
昭和十二年十月十七日京城消印

竜山七十九聯隊三中隊九班 田中英光より 東京市世田ヶ谷区
東玉川町四 岩崎英恭様 母上様 宛

前略

御心盡しの千人針只今受領、御厚心身に染て感候、これを肌につける日は待望するも不分明に候。喜代の手紙もう着きたる頃とは思ひ候も念の為叱り可置候。先は御礼旁々御返事迄。

拝具



第一回目の教育召集時に発信された葉書であり、新兵訓練を描いた「喇叭演習」漫画絵葉書が使われているのもおもしろい。『田中英光全集』第三巻・第十一巻には「戦地からの書簡」が計九十四通収録されているが、今回紹介する葉書は軍人になったばかりの初々しさが窺われる点で貴重だろう。毎日、新兵教育を受ける中で、内地の母から届いた千人針を喜んで書いた礼状であり、弾丸除けの腹巻きを巻いて前線に出る日を「待望」するとの〈覚悟〉を示している。喜代は八ヶ月前に結婚したばかりの新妻で、九月に流産していた（昭和十二年九月十八日付岩崎新宛葉書）。英光が母体の安定を

伝える母宛ての手紙を言いつけたものか、亭主閑白を気取った文面でもある。二日前、英光は母に宛て「最近喜代面会に来訪、尋ねし処、恰度手紙を出した後とか申して居りました。」（昭和十二年十月十五日付岩崎英恭・母宛葉書）と書き送っていた。この葉書を書いた二ヶ月後に除隊。

【B】 田中英光書簡

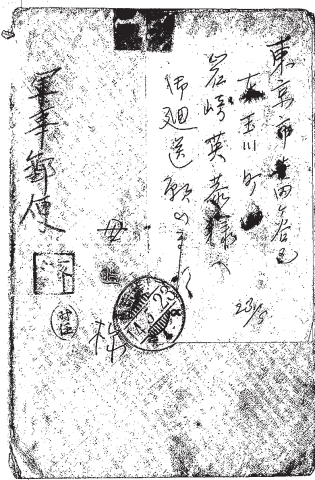
昭和十三年十一月カ（推定）

北支派遣牛島部隊気付 藤室部隊気付 北川（在明）隊 田中英光より 千葉県保田町本郷 山口琴三様方 母上様 宛

*「東京市世田谷区東玉川町四 岩崎英恭様へ御廻送願ひます 23/5」との転送依頼紙片を貼付。紙片に14・5・23の消印（局名千葉保田）あり。（軍事郵便、封書、便箋一枚）

——すでに内山から一ヶと京城から三ヶ貰いました。——せめて十日に一度位は送って下さい。兄上にも又、頼んで置きます。今日みたいに小包貰った嬉しさは、一寸金銭では買へないものです。

その中に行動でも開始したら、それこそ半年位にも貰へなくなるでせう。今の内じゃんく頼みます。それから、こんなに出す手紙く小包のこと書くの一寸、気まりがみつとも恥しい。こ



「子」のぬい山が「一」と「三」の間に三つ書きました。一せいの十月は
一上は位も送つて下さい。兄上にも又「種」が四つあります。今日のみは
小心書きたる様にしては、一寸金銀ははらへなもれず。
その中に「行」の字も附録しては、そこの半半位置にも書天へな
くなむせう。今のぬいせん「種」が、一寸、ふまりが、みまとも、ぬい。このか
紙く「小」のことも、一寸、ふまりが、みまとも、ぬい。このか
今りまの、一寸、ふまり。何と、ふまり、し、傳、中、に、け、ま、す。
このも、下、書、き、な、り、ま、し、た。上、上、も、傳、白、紙、下、こ、い。

十一月

山崎 英

〈資料紹介〉 田中英光の青年時代

れから余り書かない事にします。何卒よろしく御願申上げます。
こちらは大変寒くなりました。母上も御自愛下さい。 英光

十一月

もとは数枚あったかと思われる便箋のうち、末尾の一枚。後半が破損しており、「十一月」までしか読めない。封筒表面に「軍事郵便」と朱書きされ、検閲済を表わすゴム印圈が捺されている。軍事郵便には切手が貼られず消印も捺されないので、発信年月は推定するしかない。この書簡は当初、母が一時身を寄せていた千葉の山口琴三宛に送られたが、既に世田ヶ谷の兄英恭宅へ戻っていたため、山口が転送を依頼したものと考えられる。ただ、転送依頼が昭和十四年五月二十三日であり、便箋末尾に記された「十一月」とは半年の開きがある。

中国山西省の戦地から内地の千葉県まで郵便が届くのにはいぶん時間がかかったか、受信者山口琴三が書簡の存在を失念し英恭宅に転送するのが遅れたか、あるいは便箋と封筒が別物で錯簡がみられるのか、およそ三つの可能性が考えられる。従来の「田中英光年譜」の記述「昭和十四年三月、真野部隊から藤室部隊在明隊に転属」に従えば、「藤室部隊気付」の表記があるこの封筒も昭和十四年三月以降に使われたことになる。すると錯簡の可能性が高くなる。

三三三

『田中英光全集』収載の「戦地からの書簡」のうち、真野部隊の下限は長兄と母に宛てた「昭和十四年二月十三日付封緘葉書」、藤室部隊の初見は「昭和十四年三月二十二日付葉書」である。ただ、「こちらでも大変寒くなりました」との文面から考えて、少なくとも便箋が用いられたのは昭和十三年十一月と判断してよいだろう。なお、現時点では受信者山口琴三にまで調査が及ばない。

慰問袋受領に対する礼状で、文中の「内山」は不明。「京城」は妻喜代、「兄上」は英恭を指す。前に示した教育召集中に書いた千人針受領に対する礼状とは異なり、昭和十三年七月に再度の召集を受け、晋南作戦や山西掃蕩作戦などに従事、四ヶ月ばかりの実戦経験を積んだうえでの書簡ゆえ、緊張感が増している。「今日みたい小包貰った嬉しさは、一寸金銭では買へないものです。その中に行動でも開始したら、それこそ半年位なにも貰へなくなるでせう。今の内じゃんく頼みます」。いつまた前線への出勤を命じられるかもしれない。そのような状況下で慰問袋をねだる心情は痛切である。「田中英光年譜」には「昭和十三年十二月二十五日、山西掃蕩作戦に参加中、一時的に閑節不随に陥る悪病に罹り、山西省臨晋の陸軍野戦病院に収容された」とあるが、あるいは既に十一月中に前線を離れていたのだろうか。その寸暇にしたためられた下級兵士田中英光一等兵の母への思いは、単なる甘えとは受け取れない。

なお、この入院時に、戦地での囑目に基づく短編小説「鍋鶴」を書き、太宰治の許に送った。昭和十四年二月下旬、原隊復帰。「鍋鶴」は太宰の斡旋で「若草」第十五巻第五号（昭和14・5）に掲載された。英光の商業雑誌デビューとなる。

【C】 田中英光葉書

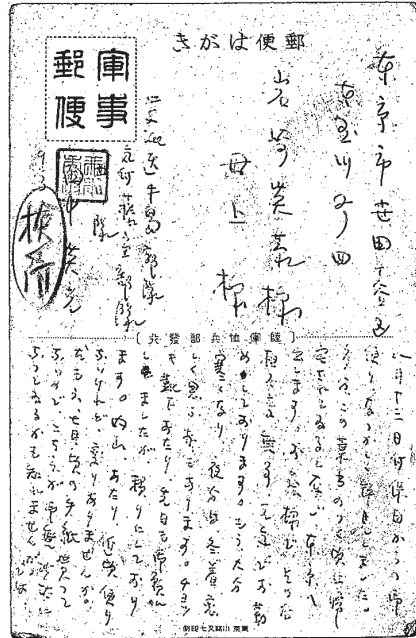
昭和十四年九月三日（推定）

北支派遣牛島部隊気付 藤室部隊 北川隊 田中英光より 東京市世田ヶ谷区東玉川町四 岩崎英恭様 母上様 宛

* 発信人署名横に「9 / 3」の記載あり。（軍事郵便）

八月十三日付保田からの御便り、なつかしく拝見しました。多分、この葉書のつく頃は帰宅されてあると存じ、東京へ出します。お蔭様で、その後相不変無事、元氣でお勤めしております。もう、大分寒くなり、夜分は、冬着恋しく思ふ折もあります。チョッキや靴下あたり、先日も御願ひしましたが、頼りにしております。内山、あたり、近頃、便りないけれど、変わりありませんか。尤も六、七月頃の手紙貰ってないので、こちらが御無沙汰になつてゐるかも知れません。

では。



原隊復帰後、半年あまり経た時点で発信された葉書。前の書簡と同じく軍事郵便で、切手は貼られず消印も捺されない。「檢濟」との朱書きがある。陸軍恤兵部発行和田香苗筆「石仏」絵葉書を使用。潞安作戦ほか戦鬪を繰り返す中で、母を安心させるかのように「その後相不変無事、元氣でお勤めしております」と近況を伝えている。文中の「保田」は前出の山口琴三の住所を指す。「内山」は不明。チヨッキや靴下など冬着をねだるのは、前便と同じである。

昭和十四年九月三日発信と断定してよいが、この葉書につづくのが、『田中英光全集』収載「戦地からの書簡」「九月十五日 田中喜

（資料紹介）田中英光の青年時代

代宛（封書）である。「この処東奔西走を続けていたので、君等の手紙や、小包も貰っていない。どうか、最近の事情、知らせてくれ。（中略）冬物の小包一つ頼みます。（チヨッキ、猿股各一ツ、靴下、手袋各二）」。内地の母にだけではなく、京城の妻にも冬物衣料を送るよう求めているのである。また、母宛葉書で「内山」からの手紙が届かないことに触れているが、妻宛書簡でもしばらく手紙を受け取っていないことを啣っている。戦場を東奔西走し、手紙や小包を受け取れない状況がつづいたのであったろう。妻宛書簡には、「部隊名、左記の如く変った。／北支派遣軍南雲部隊気付 藤村部隊 北川隊」と付記されている。母宛葉書には藤室部隊と記されているので、藤村部隊への所属変更は九月三日から十五日の間に絞られる。

ここで紹介した三通の葉書・書簡は、それぞれ、昭和十二年・十三年・十四年発信のものであった。その頃、日本の文壇では、中国戦線における〈知性の摩滅〉を扱った、石川達三「生きてゐる兵隊」（中央公論）昭和13・3）や丹羽文雄「還らぬ中隊」（中央公論）昭和13・12）昭和14・1）が注目を集めていた。しかし、中央公論社特派員として南京に飛んだ石川や、ペン部隊の一員として揚子江を遡上した丹羽は、いずれも既成作家であって戦鬪に参加したわけではない。それに対し、日比野士朗「呉淞クリーク」（中央公論）

三三九

昭和14・2)は、日中戦争に応召し渡河戦で負傷、内地送還となり除隊後に従軍経験を著した戦争小説である。日比野は、火野葦平・上田広とともに「帰還作家」として文名をあげた。

戦地に派遣された親族を持つ多くの読者にとって、作者の実戦経験の有無は大きかっただろう。戦地の兵士なら、なおさらのことである。「同志社国文学」第八十四号で紹介した、英光の昭和十四年(推定)十二月十二日付岩崎英恭宛書簡に、「九月号の中央公論に、論文出された由、当時激戦の最中にて広告もみず、更に知りませんでした。古雑誌でもあつたら送つて下さい」と記されていたことから、戦地でも「中央公論」を手にする機会があつたと思われる。日比野が河北新報東京支社勤務の新聞記者の職歴を持ち、火野が文芸同人雑誌「街」を、上田が同じく「鍛冶場」を創刊した経験を持つように、いずれも戦場に派遣される前から文筆に親しんでいた。日比野らからひと世代年下の英光ではあるが、文芸同人雑誌「非望」を創刊した点で共通する。発表時期が近すぎるくらいはあるが、英光が戦地で読んだかもしれない「呉淞クリーク」に刺激されて、「鍋鶴」が書かれた可能性も否定できない。「呉淞クリーク」は、「文学界」が制定する第六回池谷信三郎賞を受賞した。つづく第七回池谷信三郎賞が英光の「オリムポスの果実」(「文学界」昭和15・9)に決まったことは奇縁といえようか。

青春小説として名高い書簡体小説「オリムポスの果実」だが、「サブの佐藤は戦死したとか聞きました。／戦地で、覚悟を決めた晩のこと、ふつと、あなたへ手紙を書きましたが、矢張り返事は来ませんでした。／あなたは、いつたい、ほくが好きだったのでせうか」と結ばれるように、戦場を外枠としている。戦地で書き始められたとおぼしい「オリムポスの果実」の主筋である、〈平和の祭典〉ロサンゼルスオリンピックとの落差も読みどころであろう。

第十回オリンピック記念帖

英光は「オリムポスの果実」発表の八年前、昭和七年八月に早稲田大学一年生の身でロサンゼルスオリンピックに参加した。日本国内で刊行された、オリンピックのアルバムや雑誌特集は数多い。では、開催地ロサンゼルス在住の日本人は、このイベントをどのよう
に受け止めたのか。当地の日本人会が発行した『第十回オリンピック記念帖』(昭和7・12・13、羅府日本人会)を紹介したい。「羅府日本人会会報」第二卷第三号の特別編集で、全六十四頁。巻頭に「嘗れのオール日章旗と在留同胞後援のシンボル」とのキャプションが付いたグラビア一頁を擁し、以下、「第十回オリンピック大会概論」「日本参加の歴史」「荘厳、華麗、明朗の開会式」「秩父宮殿下の激励」とつづき、「戦の跡―総まくり」の試合結果に入っていく。

米国旗と日本国旗とを組み合わせた在留同胞後援シンボルマークはおもしろいが、編者識す「概論」では、「世人或はオリンピック大会を、世界的一つの祭典であると評せむ。如何にも其形式に於てさうであるが、実質に於ては各国の将来を卜する世界的対立の縮図である」と国威発揚に励んでいる。日本が「三一人もの大選手団を送り込むほど力瘤を入れたのは、「時局の上から観て、「米国打倒」の痛快味を満喫すべく、心算かに期待したからではなかつたらう乎」と推測するところにも時代の反映がみられる。

しかし編者の過大な期待は外れ、メダルを獲得できたのは陸上・水上・ホッケー・馬術のみ、金七個・銀七個・銅三個だった。十七個のうち十二個は水上が獲得し、編者は他競技の不振を嘆いている。「日本の陸上チームは総じて不振の誇りを免れないが、中にも拳闘、相撲（レスリング）引用者注、体操などがみちめであつた。」（体操、拳闘、相撲）と酷評する。英光が参加したボート競技については、「これも惨敗の漕艇」と題し、

長浜に陣取つた漕艇の一隊、初めは大部好調のやうに聞いたが、いざ戦線に立つて見ると米国は勿論、加奈陀、濠洲、伊太利の諸選手の強豪には所詮叶はない。望みを囑したフオーアさへ、跪まくも敗れたのだから、ましてエートは問題にならぬ。併し死力を出して斃る、迄戦つた丈けは認めてやらねばならぬ。

（資料紹介）田中英光の青年時代

と評している。英光は「問題にならぬ」と評されたエイトのメンバーだった。「水兵や漁夫上りらしい者もあつた」各国の選手に比べ、「我が選手は純粹学生のみ。此の点だけは誇り得る。」とも記すように、大学生クルーが日本チームの特徴だった。「附録一」の名簿「本邦選手及び役員」を閲すると、漕艇之部の選手は十八名。内訳はエイトの早稲田が十一名、フォアの慶應が七名である。もちろん「田中英光 東京府 早大」の名前も見出せる。

「オリムポスの果実」のヒロイン熊本秋子のモデル相良八重は、陸上競技之部の選手（女子）九名のひとりとして、「相良八重 千葉県 体育専門」と登録されている。千葉県八重原村出身で、幼少時に父の郷里高知に移り私立土佐高等女学校を卒業、昭和七年に日本女子体育専門学校に入学した。同年のロサンゼルスオリンピック走高跳では九位と善戦した（吉田司雄「相良八重」『田中英光事典』平成26・4・30、三弥井書店）。『第十回オリンピック記念帖』の巻末に付された「女子選手のお土産話」に、「相良、柴田嬢」の談話が載っている。

外国の女子選手はみんなませてたわ、みんな男の写真を部屋に飾つてマイ・スウィート・ハートと書いてんの、でもいつも朗らかで親切だわ、アメリカが特に親切、中西さんがハードルで

ころんだ時などはアメリカの歌を歌つてすかしたり、コーヒールをだしたり、犬ころをもつてきてなだめたりしてくれました。

みんなと着物をとつかへつこしちやつて帯を結んでやつたりなんかすると、とても喜んでキモノ姿で食堂にきたりなどしました。でもやつぱり日本は上品でい、と思つたわ――

他愛のない話柄に過ぎないが、相良八重の肉声を伝える珍しい資料としての価値はあろう。米国打倒を強調し国威発揚に励む編者の「概論」とは対照的に、「アメリカが特に親切」と言う女子選手は、期せずして国際交流を実現している。相良嬢と並んだ柴田嬢は、名簿の同じ陸上選手の項に、「柴田タカ 山形県 山形高女」と記載されている。「オリムポスの果実」で熊本秋子の友達として登場し、「ぼく」と三人で船員たちの素人芝居を見に行つたりする「内田さん」のモデルだろうか。談話に出てくる「中西さん」は、「中西みち 京都府 京都高女」。

ロサンゼルスオリンピック遠征から始まり、文芸同人雑誌「非望」創刊を経て中国戦線従軍にいたる、田中英光の青年時代の軌跡を新出資料を用いて跡付けた。昭和七年から十四年に亘る、英光数え二十歳から二十七歳の間のことである。日本が無謀な戦争を推し

進める困難な状況下で、作家への道を歩もうとした英光の意識の変遷を考えることは無駄ではないだろう。